

自己保存

飽和に達したこの地上を逃れたいと
誰もが欲していた

逃れる先は宇宙ではなかった
宇宙もまたひとつの地上なのだ

破壊か、もしくは
生命と手を切るか

知は破壊を欲しはしなかった
しかし、生命とは喜んで手を切ろうとした

はっ、はっ、は
あっ、はっ、は

ここには望むべき全てがある
ああ、真新しい地上だ

地上だ、しかもここには
かつての地上にて欲した全てがある

生命と手を切ることなど
おお、何とたやすいことだろう

知が僕を愛撫する
生命に奪されることのない純粹な知が、僕を愛撫する

知は全身で望んでいるのだ
ただただ、探求のみを

生命が望むことと言えば、
ふん、ただただ自己保存だ

そんなものは捨て去ってしまった
未来は広大無辺だ

僕は生み出すことを放棄した

何のために生み出すことが必要だろう

ああ、何という感応だろう
知が感応をもたらさうなどと誰が考えたろう

僕は、僕自身の生命が消えるとともに消えるだろう
存在は保存を欲しないのだ

存在の保存は、地上に残した生命の自己保存に任せるがいいのだ
はっ、はっ、は

(1994.2.7)